

(経験ストーリー 文章)

雪国観光圏 経験ストーリー  
晩秋編

40代女性のひとり旅。  
『真白き世界に隠された知恵と出会う』

(1日目)

(女性を乗せた列車は段々山あいへと進んでいく。  
車窓もうっすらと雪化粧がかかった山々に囲まれて行き、  
晩秋の雪国にやってきたことを実感させる。)

ローカル線の車窓を眺めて、旅に思いを馳せる。

(雪国に入り、女性が降り立つ。)

木々の葉が落ち、冬の気配を感じさせる散策路。

(女性は龍ヶ窪のほとりで立ち止まり、美しい湖水を眺めている。)

さらに溪谷の奥深くへ。

(女性は車に乗り、車窓には晩秋の美しい紅葉が通り過ぎる。)

(次に訪れたのは秘境の集落。古民家で伝統の手打ち蕎麦をいただく。)

地炉を囲んで昔ながらの知恵を聴く。  
現代人が忘れてしまった循環型の暮らしに出会う。

(主人である爺ちゃんがマタギや大根つぐらなどの話を聴かせてくれる。)

(女性は爺ちゃんに大根つぐらを見せてもらい、体験させてもらう。  
昔ながらの知恵に触れて思わず嬉しくなる。)

爺ちゃん「冬の間は雪に埋もれるっけ、雪で大根を冷やしときゃそ、いつでも新鮮なんさ」

(夜、宿で地炉を囲んで)

地元のお母さん(婆ちゃん)に保存食づくりを教わる。

(女性と婆ちゃんが一緒にあんぼづくり。段々夢中になる。)

婆ちゃん「桐で作ったこね鉢がどこんちにもあってそ、  
それであんぼをつくって。冬のごっつおだて。」

(2日目)

翌朝は出発まで時間がたっぷりある。  
なにもしない贅沢を味わう。

(女性はひとり地炉から窓の外にある里山を眺め、ほっこりと癒されている)

出発のとき、お母さん(婆ちゃん)が見送ってくれる。  
帰りの電車でどうぞ、とおにぎりをいただく。

(婆ちゃんと別れ、女性は名残惜しさを感じながら冬の近づいた里山を歩いていく)

集落に佇み、  
自然と共生した雪国の暮らしを感じる。

(女性はローカル線に乗って帰っていく)

帰りの車内でおにぎりをいただく。  
爺婆ちゃんと過ごした時間の豊かさを思う。

終わり